

社会性発達に遅れの見られる幼児における共同注意能力発達の検討

占 部 のぞみ

本研究は、社会性発達に遅れの見られる幼児を対象に、社会性の一側面である共同注意行動の発達過程を明らかにすることで、社会性発達を促すかかわりについて検討をすることを目的としている。研究1では、自然な相互作用場面に近い遊びの中で共同注意行動を測定できる評価ツールであるSPACEの結果を分析し、共同注意行動の出現順序について検討した。研究2では、カリフォルニア大学Kasari教授らが開発した社会性発達に対する支援技法JASPERを参考にした、JASPERプログラムセッションでのやり取りを分析し、新たな幼児の共同注意行動を引き出す大人のかかわり方について検討した。

研究1では共同注意行動に遅れの見られる幼児28名（男児20名，女児8名）を対象とし、2018年9月から2020年9月の間に実施されたSPACE全77回を対象に分析を行った。SPACEの評価項目である共同注意行動の“指差しへの反応”“共有のために見る”“共有のための指差し”“共有のために見せる”“共有のために渡す”の出現数をカウントし、未出現もしくは1回のみ見られた項目は「0」、2回以上見られた項目は「1」としてコード化した。コード化されたSPACEデータに基づき、各対象児における初回SPACEと新たな共同注意行動の項目が出現した回のSPACEを抽出し、出現項目数ごとに群分けを行った。1項目出現群（ $N=6$ ）、2項目出現群（ $N=12$ ）、3項目出現群（ $N=10$ ）、4項目出現群（ $N=8$ ）における各項目の出現率についてCochranのQ検定、及びMcNemar検定による多重比較を行ったところ、“指差しへの反応”“共有のために見る”は、“共有のための指差し”“共有のために渡す”“共有のために見せる”よりも先に出現することが明らかとなった。また、“共有のために見せる”は最も遅れて出現することが示唆された。研究2では研究1の対象児のうち、初回SPACEで未出現の共同注意行動が後のSPACEで出現し、映像の分析が可能な4名（男児2名，女児2名）を分析対象とした。JASPERプログラムセッションで新たな共同注意行動が出現した時点までの大人と幼児の遊びとやり取り、及び共同注意行動とそれに対する反応をスクリプト化した。新たな共同注意行動を引き出す大人のかかわり方について探索的に分析を行った結果、共同注意行動の段階によって、幼児の遊びを模倣することや大人が共同注意行動を行うこと、象徴遊びに大人が適切な反応を返すことなどの異なったかかわり方が共同注意行動を引き出していることが推測された。本研究では分析人数の少なさと定型発達児及び海外の幼児との比較が先行研究との比較となった点が限界点としてあげられる。一方、本研究において、社会性発達に遅れの見られる幼児の共同注意行動の出現順序は定型発達児とは異なること、文化の影響を受けない可能性があること、共同注意行動の段階に応じた大人のかかわり方によって共同注意行動が引き出されることが示唆された。